

3・11後を生きる

やさしさ 二本松の心

被災地発

古里戻り復興へ種まき

変わり果てた古里に言葉を失った。「どこなんだろう」。東日本大震災の発生から五日後、元持幸子さん(三七)は、津波で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町に入った。母親の安否も分からない中、国際医療NGOの一員として、地元で医師らを案内した。大槌町で暮らすのは約二十年ぶり。母親は無事だった。「住民の

居場所や、自力で動きだすきっかけをつくりたい」と昨年、NPO法人「つどい」を設立した。以前は、高校まで過ごした町を「みんな知り合いで窮屈な場所」と感じていた。理学療法士の資格を取り、英国やコスタリカに滞在

したことも。震災当時は、仙台市の専門学校でリハビリ技術などを教えていた。

九月上旬、町の公民館。宮大工らが神戸大生に祭りへの思いを熱く語った。元持さんが

月命日近くに開く「つどい」。昔の暮らしから地域づくりのヒントを探った。

八月は大槌町などの女性四人を連れてスリランカへ。スマトラ沖地震で被災した女性らと交流するツアーを企画した。小さな種をまき続ける。

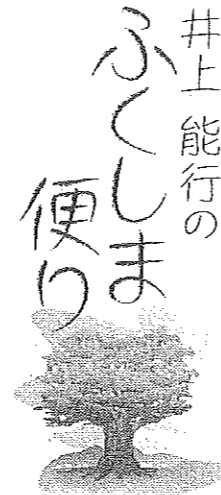


神戸大の担当者は「元持さんのおかげで、地元を根を張る人の生の話が聞ける。被災地と学生を結んでくれる人」と感謝した。毎月、町民の手芸品や手作りの菓子などを街づくりをテーマにしたNPO法人を立ち上げた元持幸子さん(左から2人目)と岩手県大槌町で

集めた市も開く。仮設住宅の談話室で手芸に取り組む女性らを誘い、少しずつ参加者を増やした。

避難者受け入れトラブルなし

初めてなのに懐かしさを感じる土地がある。福島県二本松市はそんな町だ。駅を出ると、左手にガラス張りの白い建物が見える。市民交流センターといい、一階の喫茶店「コーヒータム」は、障がいがある人たちの就労を支援するNPOが運営する。隣はB級グルメで人気の浪江焼きそばの店だ。同市には原発事故で浪江町民ら三千



東京新聞福島特別支局
電話 024(535)2327
FAX 024(535)2328



「ほんとの空」。安達太良山の上の青い空。霞ヶ城から、3月撮影

人超の人が避難している。三階にある大山忠作美術館で「五星山展」が始まった。同市出身の大山忠作と東山魁夷、高山辰雄、平山郁夫、加山又造の五氏の作品計三十五点を集めた。いずれも文化勲章受章者で、姓に「山」が入っている。大山氏の長女采子さん(俳優・一色采子)が「心の復興支援を」と訴え、四氏の遺族らが賛同して実現した。開会式後、采子さんが作品の解説をした。

魅力的な町だが、知名度はいまひとつ。采子さんは「いいものがあるのにひけらかさない。それが二本松の気質で、父もそうだった。おおくゆかしいと言っか、もったいないと言っか」と笑って話す。避難している人と地元住民とのトラブルを聞かない。市長がとつとつと語った。「被災地の人でできるだけのことをしてあげる。母の愛、無償の愛。それが二本松の心です」。だから、懐かしさを感じがするんだ。

五星山展は11月17日まで。入館料は大人400円。4日午後2時から有馬稲子さんのトークショーがある。問い合わせは、同美術館☎0243(24)1217。菊人形展も11月17日まで。入場料は大人500円。



智恵子に扮する有馬稲子像の解説をする一色采子さん。福島県二本松市の大山忠作美術館で

(福島駐在編集委員)